



子供から学び 子供と共に成長する教師に ～省察できる反省的实践家へ～

学校評価に関わる「保護者アンケート」にご協力をいただきました。お忙しい中、アンケートにご回答をいただき心からお礼を申し上げます。

学校評価は、私たちの学校の学校経営や学校運営、もっと具体的な事に関わってまでご意見やご感想を頂戴して、改善できることは可能な限り迅速に、時間がかかることであっても解決に向けて努力していくこと、次に取り組むことに気をつけていくこと等を私たち学校や教職員に教えていただける貴重な機会です。

今回の学校評価の保護者アンケートでも、取組や活動を褒めていただいたり、励ましていただいたりする意見や感想ばかりではありません。厳しいご意見や極めて真っ当なご指摘をいただきました。昔の学校では、このように学校を評価してもらって、意見をいただくということはありませんでした。

お勤めをされている保護者の皆様の勤め先でも「お客様アンケート」とか「お客様相談室」等を設けて、意見や指摘をいただき、企業改善に取り組まれていると思います。「クレームこそ宝なり」と真摯に受け止めて、会社のよりよき改善に邁進されているはずです。

私たちの学校も、そうでなければなりません。今年も含めて着任以来3年間は、その覚悟で学校評価を受け止めて、取り組んで参りました。

これまで、学校評価の保護者アンケート、児童アンケート、教職員による自己評価、学校評議員様による第三者評価を受けて、校長は教職員に「学校の常識は、社会の非常識」「前年踏襲にダウトをかけて改善を図れ」と、昨今の大きな社会的課題である「教職員の多忙化」「コロナ禍における子供たちの学びと生活の保障」等との大変に難しい折り合いをつけながら、取り組んでまいりました。その結果として、目に見えて改善が図られたものもありますが、なかなか形として改善の表れが出にくいものもありました。

例えば、「高学年における教科担任制」は他校に比べて格段に取り組んでいます。現在は、担任、ALT、学習指導員も含めて5名～6名程度の教師が、1つの学級の授業に関わっています。大勢の教師が1つの学級児童の指導に関わることで、一人一人の児童の見取りを複数の眼で見取ることができます。また、児童にとっても「新鮮な気持ちで学習できること」「切り替えができること」の印象を確認しています。そして何よりも、子供の居場所がそれぞれに作られ、自己肯定感の醸成に繋がり、学級の安定、

学級の乱れの防止につながっています。

好評だった「少人数指導」は、昨年度までは3年生以上で単元によっては希望コース別に少人数編成を設置して、算数の学習を行っていましたが、人事により2名の教員減となってしまう、同じシステムで指導ができません。現在は同一教室内での少人数指導やチームティーチングとなっています。

特別支援学級のマンパワー不足は、本校の決定的な課題です。しかし、校長としてその課題をそのままに放置しておくことは有り得ません。現在、校長経験者3名、特別支援学級経験教員3名、本校在職経験教員2名のいずれも教員免許状があり教職経験のあるOBの先生方8名に、特別支援学級の子供たちの一人一人の支援に携わっていただいています。そして、将来教職を目指して意欲のある山梨大学、都留文科大学の学生ボランティア9名には、特別支援学級を含む多くの学級の中に入ってもらって、個別の児童支援にあたってもらっています。

このように校長の理念やビジョンに留まらずに、具体的に学校改善・学校改革をしていくことは、とても大切です。特に3年間、教職員の意識改革に取り組んでいます。しかし、これが、非常に難しい課題です。学校という組織は、前例踏襲が多い組織で、前の年の仕事の仕方の塗り直しが多いです。また、トップリーダーの理念やビジョンが浸透しきれず、組織体として統一した取組が細部まで徹底しにくい組織だと思います。教師には、自分のやり方こそが絶対だという自己満足的な意識があります。教員も何年かやっているうちに固着してしまいます。でも、これを崩して変えてかえていかないと、子供の立場に立てません。「ダメなことはダメ。直すことは、絶対に直す。」という自己改革が必須です。そうでなければ、教員の集合体である学校組織は、よくなりません。それを改善するために、今は「人事評価」という制度があり、自己目標を具体的に設定させて取り組み、また、校内研究、校内研修で研修と修養に努めさせています。

良い意味で自分から自己否定して、自分をモデルチェンジしていける力をつけなければなりません。そういう意味では、「省察して反省的な意識と実践が伴う教員」として成長して欲しいと願い、日頃から指導しています。子供たちに対しても、いつも同じ事の繰り返しで「自分の机の引き出し」が増えない、増やそうとしない教師はダメです。特に昨今の学級現場では、「児童の多様性」に知恵を出しながら、柔軟に対応していける力量は必須です。例えば、なかなか着座できずに教室を歩く児童がいたとします。子供の成長・育ちは、「自立と甘えの繰り返し」だと私は思いますが、ご家庭の事情で十分に「甘える」という営みができにくかった或いは

できにくい時期には、子供は学校に来ると「教師に甘えてしまう」、もちろん相互に愛着をもった甘えは必要ですが、甘えの感情が違う方向で表出してしまふケースもあります。このように学級に30人いれば30通りの対応や指導の仕方が要求される時代です。

授業では、戦後教育の中で度々に繰り返されてきた「学力低下論争」から、「全国学力・学習状況調査」が行われ、ご承知のようにその結果は報道レベルでは順位付けのようになされています。今は、「山梨スタンダード」「甲府スタイル」という指導システムが広く、山梨県内及び甲府市内の学校では取り入れられ、特に板書とノート指導、授業の「めあて」と「ふりかえり」は、本校においても授業者には周知して行われています。子供の立場を考えると、「学習の見通しがもちやすい」「学習のめあてがよくわかる」「ノートがとりやすい」など、わかりやすい授業へ繋がっています。

しかし、「わかりやすい授業」という点ではその良さが出ていると思いますが、「豊かな授業」という点では、スタンダードやスタイルを活用しただけでは、成り立たないと私は思います。最も大切なことは、「児童と教師の人間関係が、愛情と信頼の中で結ばれているか」ということです。学校は、学習塾ではありません。授業も給食も清掃も、学習指導と生徒指導があります。

「教え込む」という言葉があります。完全に身につけさせるということです。例えば、今2年生で学習している九九のかけ算などはそうだと思います。これも必要ですし、大切です。しかし、その前提の「愛情と信頼に満ちた児童と教師のパートナーシップ」は、児童の発達段階に応じて、教師は作りだしていかななくてはなりません。学級に教室に子供がいて学ぶのは、「わからないから」「できないから」子供たちは一生懸命に学ぶのです。その気持ちを尊く思える教師でなくては、教える資格はありません。また、確かに、30枚の学習プリントの丸付けをすることも大切でしょうが、その時間を「子供とふれあう・子供理解にあてる」のために、外で子供と遊ぶ、教室で子供とふれあう、話をもっと聞くという営みの方が、子供たちも先生に親しみをもつでしょう。そして、一人でも多くの子供たちに声をかけ、笑顔で褒めてあげる、認めてあげること、時には、冷静に向き合って諭すこと。こういう営みが、教育における「自立と甘え」の地道な繰り返しで、豊かな教育に・育ちにつながっていきます。今年から火曜日・木曜日の昼休みは、40分休みにしました。教師は、自分の事務仕事だけをしているのはダメです。もっと教師として大切な営みがあるはず。それは何かを考えて、それに時間を充てられるような自己マネジメント力が必要です。

「子供の立場に立って子供から真摯に学ぶ。子供と共に自らの教職を豊かに成長させていく。その努力をする教師」に本校の教員も成長させていかなければなりません。

「オシエルズ」から学びました ～校内研修「充実した学級経営を目指して」～

本年度の本校の校内研修は、「充実した学級経営を目指して」を目標に、外部講師から指導を受けてきています。

どんなに教材研究をして授業に臨んでも、学級が明るく開かれていなければ、豊かな学びも楽しい学校生活も成り立ちません。充実した学級経営、学級づくりは、本校の教員にとってその力量形成は必須です。

11月24日(水)には、FUNBESTの「オシエルズ」さんが指導講師となって、「学級における心理的安定と笑い」と題して、ワークショップを中心に研修が行われました。

コロナ禍でマスク着用の学校生活は、子供たちと教師も、そして児童相互も、お互いの表情がよくわかりません。相手の感情理解に表情は、とても大切な役割を果たしていますが、今は大変にそのことが難しいです。しかし、そのような状況だからこそ、「笑いや笑顔」を教師自らが、積極的に子供たちに伝えていく努力をしていく必要があると思います。

当日は、ワークショップの中で即興演劇などにも取り組み、教師が見せる「笑いや笑顔」が子供たちの気持ちの安定、安心につながることを身をもって学びました。これからの学級経営に活かさせます。

運動会への御協力に感謝します

11月6日(土)の秋季運動会には、ご来校いただきましてありがとうございます。昨年度に引き続き、3部制入替・人数限定という制限のある中で開催となりましたが、ご理解をいただきましたことに深く感謝を申し上げます。

本年度の運動会の取組については、運動会の練習を特別に行う期間としての「特別日課」を設けず、普段の体育学習の積み重ねや組み合わせで運動会を行うことができました。このことにより、特に特別支援学級の子供たちが特別日課による変則な時間割による負担がなくなったこと、また、運動会終了後も算数・国語の進度を早めなくても良いこと、運動会後も体育の学習を削減しないでいつも通りにできていること等の良さがみとれました。

運動会が終わった数日後に4年生の女の子が手紙を書いてくれました。その手紙には「校長先生へ運動会ができたことへのお礼」と併せて、「来年は、今までと同じような運動会ができればうれしいです。」と綴ってありました。私の心にその言葉は身に染みしました。でも、とても難しい課題です。子供の立場に立つことが本当にできるのか、1つ1つのことに対してそういう気持ちを大切にしながら取り組んでまいります。

